

〔研究報告〕

都市部に暮らす配偶者と死別した男性高齢者の死別後の体験

白川あゆみ¹⁾

要 旨

目的：本研究は都市部に暮らす配偶者と死別した男性高齢者の死別後の支援について考察することである。従って、男性高齢者の配偶者との死別後の体験を明らかにすることを目的とする。

方法：半構成的インタビューによる質的記述的研究である。研究協力者は都市部に暮らす配偶者を亡くした男性高齢者3名であり、配偶者との死別後の体験についてインタビューを行った。結果：男性高齢者は配偶者との死別後「配偶者との死別による孤独感」「知人・顔見知り程度の者からの誘い」「新たな活動と交流」「旧来からの交流」という4つの体験をし、日々の生活を紡いでいた。「知人・顔見知り程度の者からの誘い」といった弱い紐帯が「新たな活動と交流」のきっかけとなっていた。

考察：配偶者を亡くした男性高齢者は、「知人・顔見知り程度の者からの誘い」で、「新たな活動と交流」を体験し、弱い紐帯にある人たちが、死別後の新たな体験のきっかけとなっていた。家族や親友といった深く、親密な関係だけではなく、むしろ今まで目を向けてこられなかった弱い紐帯にある人は、配偶者を亡くした男性高齢者にとって、死別後の新たな体験のきっかけとなる人たちであり、重要な資源と捉えることができる。従って看護職者が男性高齢者を支援するうえで、この弱い紐帯という資源に着目し、弱いつながりを持てる支援が求められる。

キーワード：男性高齢者、都市部、寡夫、質的研究、死別

1. 諸 言

総務省統計局による平成27年度国勢調査によると、わが国では、65歳～69歳までの女性の72.6%、男性の80.3%が有配偶者である（総務省統計局，2019）。離別でない限り、婚姻関係を継続すれば、必ず、夫、もしくは妻のどちらかが死別を経験することになる。配偶者との死別は年齢と共に増加し、平成28年、男性55-59歳では327名に対し、65-69歳では3280人、女性55-59歳では546名に対し、65-69歳では4485人（厚生労働省，2016）と、高齢期において多くの人々が死別を経験している。また、男性が妻と死別した数は約12万9千人、女性が夫と死別した数は約40万人であり、男性は女性に比べ、配偶

者と死別する割合は圧倒的に少ない。

配偶者との死別に関する先行研究では、男性は孤独感が有意に高く（岡村，1994）（坂口，柏木，恒藤，他，2000），悲嘆過程も遅れ易いことや（人見，大澤，中村，他，2000），病気，死亡のリスク要因として、女性の3倍といわれている（河合，佐々木，2004）。自殺者の割合も女性に比べて圧倒的に高い（厚生労働省，2019）。また、女性に比べ、男性は、親しい関係の対象者として配偶者を選択する者が多いが、無配偶者は、親しい関係を有する他者がいないとするものが多く、配偶者喪失に対するネットワークが脆弱で、配偶者の喪失はネットワークの縮小に直結する可能性があるといわれている（西村，石橋，古谷，他，2000）。また、高齢であることが孤立の要因として指摘されており（江尻，河合，2018），男

1) 長野県看護大学

性高齢者が配偶者を失うことは、より一層の孤立を招くことが考えられる。

都市部では、地域との交流が町村に比べて少ないことや（厚生労働省，2016）、友人・知人との交流も都市度が高いほど低い。また、男性は女性より友人・知人との交流が少ないといわれている（斎藤，近藤，村田，他，2015）。従って、都市部では一層、配偶者を亡くした高齢者は孤立化に拍車がかかるものと思われる。

今後は、平均寿命の長寿化、少子化によりさらに65歳以上人口の増加が見込まれる。さらに、都市規模が大きいほど65歳以上人口の伸びが大きいと見込まれている（内閣府，2020）ことから、都市部高齢者の支援は喫緊の課題であるといえる。しかし都市部に暮らす配偶者と死別した男性高齢者への支援について焦点を当てた研究は見当たらない。

都市部の男性高齢者を対象とすることにより、今後増加するであろう都市部の配偶者を亡くした男性高齢者の支援の一助になると考えられる。

そこで都市部に暮らす男性高齢者の配偶者との死別後の体験を明らかにし、死別後の支援について考察する。

体験とは、「自分が身をもって経験すること」。経験とは、「人間が外界との相互作用の過程を意識化し、自分のものとする」と説明されている（広辞苑）。本研究では男性高齢者が配偶者との死別後の生活の変化などについて、物理的な変化や、思いを中心に語ってもらった。これらは身をもって経験した事であり、また、「体験」には「経験」の概念も含まれることから、本研究では「経験」ではなく「体験」とする。

II. 研究方法

1. 研究対象者と対象地域

65歳以上の男性高齢者3名である。対象者が在住する地域は、いずれも東京都内の基幹駅から電車で約30分ほどでの往来が可能な地域で、都心へのア

クセスが良好な住宅地である。

2. データ収集方法

機縁法により、都内にある東京都全域にわたり介護、家事、子育て支援全般の活動を展開しているNPO法人Yに電話にて研究の趣旨および説明を行い、また文書でも同様に依頼した。東京近郊に在住する配偶者を亡くした男性高齢者で、言語によるコミュニケーションが可能であること、介護保険の認定を受けていないことを条件とし、10名の紹介を依頼した。その結果3名の協力者から承諾を頂き、研究者より電話および書面にて依頼を行い、3人全員から参加協力の了解を得た。尚、本文中、3名の対象者についてはすべてイニシャルを使用した。

半構成的面接を2回ずつ行った。1回のインタビューは1人、約60分である。2回目では、1回目のインタビューの不足情報の収集と、1回目のインタビューの内容の確認を行った。インタビューガイドを用いて、「普段の生活の様子」「配偶者を亡くしてからの生活の変化」「配偶者を亡くしてからの生活していくうえで支えとなっていること」「配偶者を亡くしてから新たに始めたこと」などを柱として自由に語ってもらった。インタビューは本人の了解を得てICレコーダーへ録音し逐語録を書き起こした。

調査期間は平成21年1月～2月である。

調査は、協力者の希望により、2名は1回目、2回目の両日（B氏・C氏）、協力者の自宅で行われた。1名（A氏）は1回目が自宅、2回目は協力者を紹介して頂いたNPO法人Yの事務所で行われた。

3. 分析方法

本研究では、統計調査では把握が難しい、一人一人の体験に着目するものであるから、質的記述的研究方法を選択した。書き起こした逐語録を精読し、質的帰納的分析方法により、分析を行った。まず、死別後の体験に関する記録を抽出しコード化を行った。次に類似性に従ってデータの統合化を行い、サブカテゴリーにし、さらに統合化をすすめ、カテゴリー化を行った。インタビュー内容、および、分析

結果については質的研究の経験のある研究者からスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

本研究は研究者が属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：平成20年#14）。協力者の紹介を依頼したNPO法人Y、および協力者3人にそれぞれ、口頭、および書面で研究の目的、方法を説明し、倫理委員会の承認を得ていること、個人情報情報は厳守されること、また、学会や論文等で研究結果を公表する可能性があること、この際にも個人情報情報が漏れることは一切ないことを伝えた。また、途中で研究の協力を撤回ができる事、その際に一切不利益が生じないことを約束し、対象者3名より口頭ならびに書面にて承諾を得た。

III. 研究結果

1. 協力者の背景

協力者の基本属性は表1に示すとおりである。全員70代であり、平均年齢は75.3歳であった。全員がホワイトカラーとしての職歴を有し、現役時代は役職を持っていた。一人暮らしが2名（B氏・C氏）、長男との2人暮らしが1人であった（A氏）。

2. 配偶者の死別後の4つの体験（表2）

【 】はカテゴリーを、「 」内はサブカテゴリーを、「斜体」は協力者の語りを記す。

配偶者との死別により、男性高齢者は【配偶者との死別による孤独感】を体験していた。しかし、【知人・顔見知りの者からの誘い】で【新たな活動と交流】をはじめ、配偶者との死別前から続く【旧来からの交流】といった配偶者死別後に4つの体験をしていた。

体験1：【配偶者との死別による孤独感】

「1年近く孤独感に襲われた（C）」「納骨が済んでも何も無くなってから孤独感に襲われた。夜は特にとても寂しくなった（C）」。戦後、高度成長の中、終身雇用制度があたりまえであった社会の中で、男性は仕事で家族を養い、女性は家事・育児を行い家庭を守るという、概して日本社会に張り巡らされたいわゆる性別分業意識の色濃く残る時代を生きてきた男性高齢者は、長年連れ添い、家庭を守ってきた配偶者の喪失は男性高齢者を孤独感に陥らせて、精神面に影を落としていた。

体験2：【新たな活動と交流】

配偶者との死別は孤独感に襲われるという、男性高齢者の精神面に影を落としたものの、しかし、その状況にとどまることなく、配偶者との死別後、周りの人たちのつながりの中で、新たな体験をし、新たな生活へと大きな舵を切っていた。今まで携わっていなかった「新たな活動を楽しむ」こと、そこで「新たな活動と仲間を得る」ことによって、死別後、【新たな活動と交流】を始めたのである。男性高齢者は新たな場所で新たな活動を行い、新たな人間関係を紡ぐという、実に柔軟な姿勢で日々を生きていた。そして、男性高齢者にとって日々を生きる生きがいとなっていた。「あのう、暇が無くてね。困ったな、こんなに色々な会合、少し減らそうかな、と思った時もありますしね（B）」「会合があるということは生きがいなのかもしれない（B）」。他者と日々交わされる交流は男性高齢者の今を生きる新たな生きがいの獲得に帰するものであった。

体験3：【知人・顔見知りの者からの誘い】

新たな活動と交流の契機となったのは【知人・顔見知りの者からの誘い】であった。Aさんは亡く

表1. 対象者 概要

	年齢	婚姻期間	死亡時の妻の年齢	死別からの経過年数	最終学歴	職歴	現在の家族形態
A氏	70歳代	40年代	60歳代	2年	大学卒	会社員	長男と2人
B氏	70歳代	40年代	70歳代	6年	大学卒	会社員	1人
C氏	70歳代	40年代	60歳代	4年	高校卒	会社員	1人

表2. 配偶者と死別した男性高齢者の4つの体験

4つの体験	サブカテゴリー	代表的なデータ
【体験1】 配偶者との死別による 孤独感	配偶者が亡くなり精神的な影響が生じた	<ul style="list-style-type: none"> ・1年近く孤独感に襲われた (C) ・納骨が済んで、もう家の中が空になって、全部一人で使うんだよね、っていうことになって、それで孤独感に襲われだしたですね (C)
	新たな活動を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・(活動は) 面白い。まあ、あのう、女性7割くらいなんですよ。男がまあ、2割とか3割くらいいる (A) ・一つはやっぱり、何て言うのかな、地元の人たちと、そういう神社だとか、そのあれで色々歓談している時は楽しい (B) ・今の活動は面白い (A) ・(体操仲間と) カラオケの、暇だったらスナックに行ったりして、連れだって、それで歌ったりしてまあ、面白いですよ (C)
【体験2】 新たな活動と交流	死別後に新たな活動と仲間を得る	<ul style="list-style-type: none"> ・(会社員時代、地区活動は) していません、全然、そういうところに役立つとは思ってもいなかったからね。また忙しくて世界中周ってたから (A) ・神社っていうのは月1回のアレ (活動) があるんですよ (B) ・何て言うかね、あのう、僕はね、魅力を感じるというよりもね、この地域の活動としてね、こういう風にやってるのか、というのにね、これはやんなきゃいけないとかね、地域の活動で、そういう意識が十分あるわけですよ (A) ・優先しているのは市民活動の方ですよ (A) ・体操にも入ったし。それから体操の会は面白いんですよ。あのう、カラオケの会を作っているんですよ (C) ・やっぱり地域社会で生きていかないといけないのかな、と思った。それが拠り所、っていうのはちょっと少しおかしいんですが、そこに力点があると言うか (A)
	誘われて新たな活動をはじめた	<ul style="list-style-type: none"> ・ある人がね、××ネットワークの活動してくれませんか、と言ってきたんです (A) ・やりたいというよりも誘われたから行くと言う、そういうところから始まっているんです (A) ・(父親の知り合いの老人会長に) 手伝えよ、って言われたから「わかりました」って、断る理由もないですからね (B) ・僕がここで一人暮らしをしているって知っているから声を掛けてくれて体操に入った (C) ・(誘ってくれた人とは) それまでもね、あいさつ位はしてましたよ (A) ・(老人) 会長に言われたから入ったようなもんだね (B) ・(団地の人) から今誘われて、気を使ってくれるからこちらも感謝して (C)
【体験3】 知人・顔見知りの者からの誘い	死別前までは関心はなかった	<ul style="list-style-type: none"> ・関心はなかったの。そうしたらさ、亡くなってしばらくしたらOさんっていう人が手伝ってくれて言うわけ (A) ・その活動は昔、女房がやっていたんですよ (A) ・老人会って60歳からいいんだよね。でも僕はね、あるのは知ってたよ (B)
	会社・学校の仲間との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・同期だとか、支店の会だとか、色んな会が4つくらいあるんですよ。それで、最近はずもう、年も年なので昼食会が多くなったんですが、あのう、適宜集まって話をする、というようなことがありますね。まあ、そういうのが孤独を紛らわす方法と言いますか、あのう、日常生活の楽しみの生活になっているということですよ (B) ・会社の支店に入った時、Cさん怖かった、って言うんだよね、ははは。そんなはずはいだらう、って言うんだけどね。ははは。今だから何でもべらべら話ができますけどね。だから、そういう仲間がいる、っていうことですよ。 ・技術者が集まって、技術者だけです。営業は別。そのOB会みたいのがあるわけですよ。 ・大学の運動の会もあるし、それから大学の方の代議員もやってるし (B) ・男同士の飲み会っていうのも10年くらい続いていますけど、僕は一番年下で、ホッケーの運動部の、8人くらいで毎月集まっているんですよ。 (B) ・クラス会っていうのがあるんですよ。小中高大。大学も3つあるんですけどね。そのクラス会がね、まあ、部活もやってたからね。5つか6つあるんですよ。春秋あるんですよ。で、そういうのに行くのが楽しみであるということ (A)
【体験4】 旧来からの活動と交流		

なった妻の知人から、Bさんは父親の知り合いから、Cさんは同じ団地の知人から誘われていた。
「ある人が××ネットワークの活動してくれませ

んか、と言ってきた。その活動は昔、女房がやっていたんですよ (A)」「それでまあ (老人会の) 会長に言われたから入ったようなもんだね (B)」。

「(誘ってくれた人は) それまでもあいさつ位はして
いましたよ (A)」。このように男性高齢者は死別
後、知り合い程度の人たちから“誘われた”とい
う、非自発的な立場で新たな体験をすることになっ
た。

体験4：【旧来からの活動と交流】

「会社・学校の仲間との交流」といった【旧来か
らの交流】を続け、会社等の企業から引退した男性
高齢者は学生時代の仲間や同僚、部下などの現役時
代の仲間との交流を楽しんでいた。「やっぱ男同士
の付き合いで飲み会っていうのも10年くらい続い
ていますが、僕は一番下で、ホッケーの、運動部
の、8人くらいで毎月決まっているんですよ (B)」。
同じ時代を同じ空間で多くの時間を共有し、共に喜
び、時には共に辛酸をなめた仲間との交流は男性高
齢者自身の人生を振り返り、見つめ、肯定し、互い
に立場を理解しあえる大切な機会であった。「クラ
ス会っていうのがあるんですよ。小中高大、大学も
3つあるんですけどね。そのクラス会がね、まあ、
部活もやってたからね。5つか6つあるんですよ。
春秋あるんですよ。で、そういうのに行くのが楽し
みであるということ (A)」「同期だとか、支店の会
だとか、色んな会が4つくらいあるんですよ。それ
で、最近はもう、年も年なので昼食会が多くなっ
たんですが、あのう、適宜集まって話をする、とい
うようなことがありましてね。まあ、そういうのが孤
独を紛らわす方法と言いますか、あのう、日常の生
活の楽しみの生活になっているということですよ
(B)」「会社の支店に入った時、Cさん、怖かっ
た、っていうんだよね、はははは。そんなはずない
だろう、って言うんだけどね、ははは。今だから何
でもべらべら話ができますけどね。だからそういう
仲間が居る、っていうことですよ (C)」。【旧来
からの交流】は、懐かしむ過去を、現在の生きる糧
とし、配偶者亡き後の新たな生活を支えるもので
あった。

IV. 考 察

配偶者を亡くした男性高齢者は、死別当初、孤独
感に襲われるという体験をしていた。大都市に暮ら
す男性高齢者は女性に比べて孤立しやすく（斎藤、
冷水、武井、他、2010）、配偶者を亡くした男性高
齢者では、閉じこもり傾向にあるといわれている。
また、女性は配偶者以外に親しい関係にある人とし
て、多面的なネットワークを有しているものの、男
性では、そのネットワークが配偶者中心であるた
め、配偶者との死別はネットワークの縮小に直結す
る可能性があるといわれている（西村、他、2000）。
女性では、配偶者以外の人たちにより、配偶者との
関係を補完することができるが、配偶者中心であ
った男性ではそれが期待できない。このことが要因
の一つとも考えられる。本研究の男性高齢者は、孤
独感に襲われる体験をしていたものの、しかし従来
の結果とは異なった。それはネットワークを築くこ
とができたこと、つまり、本研究の男性高齢者たち
は配偶者との死別後、【弱い紐帯からもたらされる新
たな体験】を始めていたこと、そして【死別前から
繋がる交流】がその理由の一つと考えられる。

1. 弱い紐帯からもたらされる死別後の新たな体験

本研究では大都市に暮らす男性高齢者は、女性に
比べて孤立しやすく（斎藤、他、2010）、配偶者を
亡くした男性高齢者は、閉じこもり傾向を示唆する
従来（東、永田、2005）とは異なった。本研究
の男性高齢者3人全員は配偶者との死別後、【新
たな活動と交流】を始めていたことがその理由の一
つと考えられる。

男性高齢者の新たな【新たな活動と交流】のき
っかけとなったのは、妻の知人や、父親の知人など、
常日頃から親しい友人やなじみの関係ではなく、い
わゆる弱い関係で結ばれていた人たちからの誘いで
あった。社会学者のマーク・S・グラノヴェッター
は価値ある情報は、強い紐帯よりも弱い紐帯が重要
であるという「弱い紐帯の強み」という理論を論じ
ている（マーク・S・グラノヴェッター、2012）。自

分にとって新たに価値のある情報は、家族や親友という強い関係、つまり、強い紐帯で結ばれた人たちよりも、むしろ、顔見知り程度の弱い紐帯で結ばれた人たちからもたらされるという。これは、紐帯が弱いと、異なった交際圏に参入することになり、そこで異なる人たちと連結し、新規の情報や知識を獲得することができる。一方、紐帯が強いと、類似性、同質性の同じ圏内に密封されることになり、新規性のある知識や情報から遮断されるようになる。本研究では、妻の知人や父親の知人、同じ団地の人という、グラノヴェッターの論じる弱い紐帯にある人たちにより、新たな情報をもたらされ、新たな交際圏へと発展したといえよう。そうすると、日々、共に何らかの活動をしているとか、親友、親族であるといった親しい関係ではなく、むしろ顔見知り程度の日ごろからの人間関係を有していることが新たな活動のきっかけとしては、重要な事項の一つであり、男性高齢者を支援することに繋がったと考えられる。

友人関係では、高齢期の親しい関係（西村，他，2000）や、親しい友人（浅川，高橋，1992），など、多くが「親しい」、つまり、強いつながりを軸として論じられてきた。しかし澤岡ら（澤岡，古谷野，本田，2012）は、友人や親しい人という、強いつながりに目が向けられ、結果的にあいさつや世間話程度の日常的な交流は見逃されてきたが、高齢者が日常交流するのは非親族との比重が多く、また、交わされる会話の内容もあいさつや世間話の習慣的なものが多いことを明らかにした。本研究からは、このような弱い紐帯にある人たちが、新たな情報の糸口になることが伺え、配偶者を亡くした男性高齢者にとって重要な人的資源となる可能性があると考えられる。

本研究の対象者は学歴が高い人たちであった。学歴が高くない人は中年期から更年期にわたり長期的な孤立になりやすいとの指摘がある（斎藤，他，2010）。それは、必然的に出会いが少なくなり、新たな友人を獲得する機会が少なくなると考えられ

る。よって本研究の対象者は新たな活動をはじめるとあって学歴という側面が有意に働いた可能性も考えられる。

地域活動（老人クラブや会）への参加は「友人に誘われた」ことが最も多いと指摘している報告（矢野，近森，広瀬，他，2008）や、外出や誘いがあることが社会活動に結びつく（岡本，岡田，白澤，他，2006）との指摘もあるが、しかし「友人」の定義があいまいであり、本研究のような顔見知り程度の弱い紐帯なのかどうか、もしくは日頃から交流が盛んであるかどうかは不明である。また、これらの先行研究は男女が対象であることや、配偶者との死別後の参加を論じていないため、本研究との比較はできない。これらの先行研究に対し、本研究では、情報を提供した人が弱い紐帯の人たちであること、配偶者を喪失した男性高齢者という限定した属性を対象としていることは新たな知見といえる。

また、都市部という地域は、町村に比べて近所づきあいは少なく、さらに男性は女性より孤立しやすい（江尻，河合，2018）（斎藤，他，2015）ことから、都市部在住の男性高齢者は、親密な関係よりも、むしろ顔見知り程度の弱い人間関係を有する可能性が高いと考えられる。従って弱い紐帯にある人から新たな情報をもたらされる機会が多いことが考えられる。

2. 死別前から繋がる交流

今回の協力者は、現役時代の会社の仲間との交流を現在も続けていた。1930年代生まれの本研究の男性高齢者は、日本の経済が大きく躍進し、成長著しい時代を会社と共に過ごしてきたいわゆる「企業戦士」である。終身雇用が当たり前の時代で、家族よりも長い年月を共に過ごし、辛酸をなめてきた仲間でもある。このような終身雇用という形態の中で築かれた長期に及ぶ人間関係は男性高齢者にとって簡単に断ち切れるものではないことが、本研究からも伺えた。また、都市男性高齢者の交流のきっかけは、職場や、学生時代の仲間が多いと言われている（古谷野，西村，安藤，他，2000）（古谷野，西村，

矢部, 他, 2005). また, ホワイトカラーはブルーカラーに比べて友人が多いとも言われている(浅川, 高橋, 1992). 本研究の男性高齢者も職場や学生時代に知り合った人たちの交流が継続し, また職業も会長や金融機関支店長, 課長といったホワイトカラーであったという背景が, 配偶者との死別後も従来からの交流を継続させ, 現在の生活の中に位置づけた生活を送り, 有利に機能した可能性が考えられた.

一方, 配偶者との死別前から, 旧来からの交流がどのように男性高齢者の生活に位置付けられていたのか, 今回は明らかにはしていない. しかし, 配偶者亡き後は, 「孤独を紛らわす」「生活の楽しみになっている」「仲間がいる」といった言辞から, 旧来からの交流は, 単なる楽しみに留まらず, 男性高齢者の孤独を紛らわし, 明日への活力となり, 生活を支えるといった, 楽しみ以上に, 生活に重要な位置づけとなっていた. そして学生時代, 会社員時代からの交流の継続が, 配偶者との死別後, 楽しみというだけではなく, 孤独を紛らわすといった, 情緒的サポートを得ていることが示唆された. しかしながら, そこで交わされる内容や, やりとりなど, 交流そのものがどのように行われているのかについてはほとんど明らかにされてはいない. 男性高齢者の旧来の友人との交流の目的は安心感を得ることである(平野, 佐伯, 上田, 2017)との指摘もあるが, 対象者が要支援者であり, 本研究の高齢者とは属性が異なり比較検討はできない. 何を目的に, そしてどのようなやり取りが行われ, 結果, 旧友との交流が男性高齢者にどのような影響をもたらすのか考察することで, 新たな支援の課題を見出す手がかりとなり得る. そして配偶者の死別前と死別後における旧友との交流にどのような変化があるのかそれを探る手掛かりとなる可能性がある.

3. 看護の可能性

これまで配偶者との死別した遺族への支援として, 多くの知見が積み重なってきた. 例えば, 死別による二次ストレスへの支援として, 個人単位では

なく, 家族単位でのケアの必要性(坂口, 2001), 遺された遺族のサポートグループ(広瀬, 田上, 柏, 他, 2004)やミーティング(河合, 1994)への参加による心理的効果などである. これらはいずれも, 死別後からはじめて関わる支援である. 一方, 本研究では死別前からの弱い紐帯が, 死別後の支援につながる重要な人的資源と示唆された. つまり, 死別前からの弱い紐帯の有無が配偶者を亡くした男性高齢者への支援の一つとして強調されると考えられる. 従って, 地域で働く看護職者は, 家族, 親戚, 親友といった強い紐帯だけでなく, 顔見知り程度, 挨拶を交わす程度といった, 弱い紐帯を支援の重要な資源として捉えることが必要である.

対象者は公共交通機関の利便性が高く, また, 様々な施設の数も多い都市部在住であり高齢者であっても時間を厭わずに外出できる環境である. 夫婦揃っての外出も容易に可能であり, 例えば地域で働く保健師が事業を企画・展開する際に参加者を個人単位として捉えるのではなく, 夫婦を一つの単位と意図的に捉え, 参加を促すことにより, 夫婦共通の知人ができることが期待できる. また住民の生活の場で働く訪問看護師は配偶者である妻の交友関係に関心を向け, 雑用や手伝い等, 細々とでも男性高齢者が参加できるよう工夫し, 妻の友人と顔なじみになれるように啓蒙することも, 弱い紐帯を結ぶ契機となり得る.

都市部では多様なサークルや団体が存在し, 様々なイベントや趣味活動, 社会活動が身近で行われており, そうした活動を折に紹介することも弱い紐帯を結ぶ契機となり得る.

このように地域で働く看護職者は, 弱い紐帯を意図した取り組みを柔軟に実践していくことが必要である.

本研究の調査時期は平成21年(2010年), 遡ること約10年前である. 平成27年度国勢調査(総務省統計局, 2019)によると, わが国では, 死別は, 平成27年度, 男性(15歳以上)3.2%に対し, 平成22年度では3.1%, 女性(15歳以上)では平成27年度

14.2%に対し平成22年度は13.9%であり、大きな経年変化はみられない。しかし2010年、総人口に占める高齢者は23.0%、対して、2020年では、28.9%まで伸びている。今後、高齢者の増加に伴い、高齢の死別者の増加も予測されるが、しかし、死別した配偶者への新たな保健福祉施策も見あたらない。また研究の動向では、医学中央雑誌で2011年～2020年の10年間において「配偶者」「死別」「男性高齢者」での検索結果、原著論文は、わずか5件のみであり研究の積み重ねは少ない。このような配偶関係、研究動向を鑑みると本研究のデータは10年前ではあるが、現在においても一定の示唆を与えるものとして有意義であると考えることができる。

V. 研究の限界と課題

本研究には2つの限界がある。一つ目は想起バイアスが生じる可能性である。死別後2年から6年という幅があり、記憶も死別時直後と比較すると鮮明ではないと考えられることである。二つ目は対象者が3人であり、一般化することはできない。今後は対象者を増やしていく必要がある。以上が本研究の限界と考えられる。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

著者の貢献：ASは、研究の企画、データ収集、分析・解釈、論文執筆の全研究プロセスを担当した。

（受付 '20.07.08）
（採用 '20.12.24）

文 献

浅川達人, 高橋勇悦: 都市居住高齢者の社会関係の特質—友人関係の分析を中心として—, 総合都市研究, 45: 69-95, 1992
東 清巳, 永田千鶴: 男性高齢者の配偶者喪失後におけるアイデンティテの揺らぎと対処, 熊本大学医学部保健学科紀要, 1: 45-56, 2005
江尻愛美, 河合 恒: 都市高齢者における社会的孤立の予測因子: 前向きコホート研究, 日本公衆衛生雑誌, 65(3): 125-133, 2018

原田 謙, 杉澤秀博, 浅川達人, 他: 大都市部における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康, 社会学評論, 55(4): 434-448, 2005
人見裕江, 大澤源吾, 中村陽子, 他: 高齢者との死別による介護者の悲嘆とその回復に関連する要因, 川崎医療福祉学会誌, 10(2): 273-284, 2000
平野美千代, 佐伯和子, 上田 泉, 他: 要介護認定を受けた高齢男性の社会活動とその目的, 日本公衆衛生雑誌, 64(1): 14-24, 2017
広瀬寛子, 田上美千佳, 柏 祐子, 他: 高齢者にとってサポートグループの意味—がんで配偶者を亡くした2事例の分析を通して, ターミナルケア, 14(5): 419-426, 2004
河合千恵子: 配偶者との死別への援助—ウィドウ・ミーティングに参加した一事例から—, 心理臨床, 7(4): 199-204, 1994
河合千恵子, 佐々木正宏: 配偶者の死への適応とサクセスフルエイジング—16年にわたる縦断研究からの検討—, 心理学研究, 75(1): 49-58, 2004
厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当) 編 一般財団法人厚生労働統計協会: 平成28年度人口動態統計 中巻 2016
厚生労働省: 自殺対策白書. <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/16/>. (2020年2月22日)
広辞苑 第7版 新村出編 岩波書店.
古谷野 亘, 西村昌記, 安藤孝敏, 他: 都市男性高齢者の社会関係, 老年社会科学, 22(1): 83-88, 2000
古谷野 亘, 西村昌記, 矢部拓也, 他: 関係の重複が他者との交流に及ぼす影響—都市男性高齢者の社会関係—, 老年社会科学, 27(1): 17-23, 2005
Mark. S. G. / 大岡栄美訳, 野沢慎司監 弱い紐帯の強さ: 126-158, 勁草書房, 東京, 2012
内閣府: 平成30年版高齢社会白書4, 地域別に見た高齢化, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_1_4.html. (2020年11月13日)
西村昌記, 石橋智昭, 古谷野 亘, 他: 高齢期における親しい関係「交友」「相談」「信頼」の対象者としての他者の選択, 老年社会科学, 22(3): 367-374, 2000
岡村清子: 配偶者との死別に関する縦断的研究, 老年社会科学, 15(2): 157-165, 1994
岡本秀明, 岡田准一, 白澤政和: 大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因, 日本公衆衛生雑誌, 53(7): 504-515, 2006
斎藤雅茂, 冷水 豊, 武居幸子, 他: 大都市高齢者の社会的孤立と一人暮らしに至る経緯との関連, 老年社会科学, 31(4): 470-479, 2010
斎藤 民, 近藤克則, 村田千代栄: 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差 JAGESプロジェクトから, 日本公衆衛生雑誌, 62(10): 596-608, 2015
坂口幸弘, 柏木哲夫, 恒藤 暁, 他: 配偶者喪失後の時間経過と精神的問題との関連, ターミナルケア, 1(1): 71-76, 2000
坂口幸弘: 配偶者との死別における二次的ストレスと

心身の健康との関連, 健康心理学研究, 14(2): 1-10, 2001
澤岡詩野, 古谷野 亘, 本田亜起子: 都市のひとり暮らし
後期高齢者における他者との日常的交流, 老年社会科学,
34(1): 39-45, 2012

総務省統計局: <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/sokuhou/01.htm>. (2019年2月22日)
矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, 他: 高齢男性の社会参加
要因, 川崎医療福祉学会誌, 17(2): 437-443, 2008

Post-bereavement experiences of elderly men living in urban areas

Ayumi Shirakawa¹⁾

¹⁾ Nagano College of Nursing

Key words: Elderly men, Urban area, Widower, Qualitative study, Bereavement

Purpose: This study aims to clarify the experiences of elderly men living in urban areas after the death of their spouses and to examine the support available to them after bereavement.

Method: This is a qualitative descriptive study that used semi-structured interviews. The participants were three (3) elderly men who lost their spouses and were living in urban areas. The participants were interviewed regarding their experiences after the death of their spouses.

Results: After their bereavement, the elderly men experienced “loneliness due to the loss of their spouse,” “invitations from acquaintances and persons with whom they were only slightly acquainted,” “new activities and interactions,” and “interactions from earlier times” in their daily lives. “Invitations from acquaintances and persons with whom they were only slightly acquainted” or weak personal connections spurred “new activities and interactions.”

Discussion: Elderly men who had lost their spouses experienced “new activities and interactions” along with “invitations from acquaintances and persons with whom they were only slightly acquainted,” and people with weak personal connections with the elderly men spurred on new experiences after bereavement. Aside from deep and intimate relationships, such as with family members and close friends, weak personal connections that had been hitherto ignored can also be regarded as an important resource as they trigger new experiences for elderly men after the loss of their spouse. Therefore, when nurses provide support for elderly men, it is necessary for them to pay attention to weak personal connections and to provide related support.